

時事新報定額
時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細の商況物
價報告あり其代價送料廣告料は左の如し
一號二圓〇一月計五十五圓〇三月計一圓五十圓〇六月計三
圓〇一年計六圓〇月計休刊
○時事新報社東京市本町三丁目ノハ右定額ノ外一月計十三圓ノ
郵費料ヲ中受ス
時事新報廣告料(附定)

本社(寄稿)付
一行五圓 寄稿者 寄稿 寄稿 寄稿 寄稿
一行 寄稿者 寄稿 寄稿 寄稿 寄稿

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より
各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を
填寫するより各社同一の記事を掲載するも事からず獨
り時事新報社は社員並に通信員を以て所屬の社
に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通
信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信
ずる方多きが如し爲めに往復して生じたる場合も事か
らざれば本社に記事論説を寄稿せんとする方は直接に
本社に向て發送せらるるものとす

日本の金利

米國の外資が目下十億弗の巨額に達したることは此報
の雜報に見えたる所なれども尙ほ精密の計算を遂ぐれ
ば外資は遠く其上に超過したりと云ふ米國に資本の豐
なるは此一事にても想像するに難からず然るに資本の
豐なる此米國に於て金利の割合如何と云ふに今日の日
本に比して案外にも安利ならず左の金利表を見て知る
べし

Table with columns for country names (e.g., アルバマ, アリゾナ, カリフォルニア) and interest rates. Includes a section for '法律によりて公認さるる金利の割合' and '双方の契約に依て成り得べき金利の割合'.

右の表に據れば年五分の利子は僅にイリノア及びルイ
ジアの兩州のみにして他は何れも六分以上ならざる
なく紐育の如き米國中心の場所にも亦六分の定め
にして高きは一割より一割二分もあり双方の契約に依
て効力を有する金利に至ては一割以上を越ゆるもの珍
しからず右は法律上の金利なれども實際の貸借に至て
は之より以下に貸すものなく紐育、ボストンの如きも
通常六分にして時に一割以上の利子を聞くものなきに
あらず之より西部諸州に移るに隨ひ金利愈々高くして
八分より一割、一割より二分三分を進み行きて商賣上
の金利と雖も決して安からず高利貸に至ては只驚くの
外なし例へば質屋の如きは法律上三割を越ゆべからず
その制限あれども實際は此制限に従ふものなく定め
利子の外に手数料の名を以て徴收し備付の家具などを
典せんとするときは幾割の利を拂ふ外に一ヶ月一割の
手数料を取上げて一年十二割以上に達するものあれば
日本の高利貸などは更に驚くに足らず穀物市場など
にては一時間貸付と云ふ刻付の金利さへありと云ふ高
利貸は特別の事として普通預金の利子も甚だ安からず
大抵は貸付歩合の一分引にて預かるを常とすれども商
賣地方に預金は至て少なく尙ほ餘裕あれば之を商業に
投じて金を蓄せ置くものなき米國に金利の高くして商
業の活潑なるは故なきにあらざるなり 竊て我國金利
の實況を見るに近來市場の金融は益々緩にして金利下
落の大勢滔々底止する所を知らず此勢を以て進めば或
は米國よりも安利國となるやも計る可からざれば共數年
前迄は高利國として知られたる我國が僅々の歳月間に
此約變は奇なりと云ふべし或は此變動の原因を求めば
近年爲替相場の下落に從て銀貨の流入も與りて大に力
あるとならん又國內に金融疏通の便利を増したるも其
一原因ならん又貸附金の方法も從來は總て高利貸の風
を免かれず多少の危険を冒して融通を與へたるが故に
勢ひ高利を食ふの止むを得ざる次第なりしと近來は漸
く信用(事う抵當)に重きを置きて貸借するものなれば其
危険の薄き割合に利子の低落も自から故なきにあらざ
れども經濟自然の約定に於て金利の高低は資本の多寡
に伴ふものなりとすれば米國と我國との資本を比較し
て我國が米國よりも安利國たるべからざるも明白
なる可し其他金融機關の發達、信用の普及は尙も近
年我國の進歩見るべきものなきに非ざれども之を米國
に比すれば未だ及ばざるものと云はざるを得ず今
後には知らず今日直に米國よりも安利國ならんものと到
底望む可らざる所なるに事の實際に於ては則ち然らず
誠にも不思議の現象なれども一步を進めて我國國以來の
事情を考れば自から理由の存するものあるが如し即
ち我輩は此現象を以て資本と實業と相投するものと能は
ざるの罪に歸せんと欲するものなり我國の實業は不幸
にも學者士君子の爲めに度外視せられて文明の時勢に
後れたるものと甚だしく、興すべき事業尙なからざれば
も資本は都て無學なる富豪の手裏に歸して容易に手放
さるるが故に天下の人心漸く實業に向ひたる今日にて
も心に思ふのみにして之に實力を假す者少なし富豪必
すしも事を起すの勇なきにあらず射利の熱心は壯者に

讀るなしと雖も如何せん今後起すべき事業は文明の新
事業にして古風なる老練の金で得べき所にあらざるを
知らざるは之を恐るゝの本にして萬事都て引込思案と
なり先づ公債か手堅き株券に投資するの安全なる
に如かずとて新事業と云へば殆んを蛇蝎視して顧みさ
るものとすれば資本は活潑なる實業社會と益々縁を薄く
して運動の區域を縮少し遊金いよゝ増加して金利い
よゝ下落するは自然の數なりと云はざるを得ず若し
も此資本が實業に密着して新事業の技に振起したらん
には我國の資本は寧ろ不足を感ずるものと云われ今日
の如き緩慢を見るものと云はざるは萬々保證する所なり今試
に其新事業を求めば滿目遺利あらざるはなし化學器械
學の進歩は製造發達の機を促すものにして技師に人あ
り職工も亦次第に事に慣れ何を金で成らざるものあ
らんや目下漸く結に就きたる製絲紡績セメント等の事
業を外にしては陶器の事あり酒造の事あり製油の事あ
り製糖の事あり或は紡績の事既に成る上は進んで大に
綿布を織る可し砂糖の輸入斯くまで盛なれば粗質を
入れて精製の方法もある可し鑛山の事業も所謂山師の事
として排斥するの理由はあらず北海道は援置き近
く奥羽の地方にも多量の未開地少なからず外に向て航
海の業を起さんとすれば當に日本の輸出入のみならず
他國と他國との間に往來しても利する所ある可しいよ
いよ國內に資本の餘りて金利の低落するものと云はば之
を外國に持出して運轉するの法もある可し尙ほ之より
も眼前に利益の運られたるものは生絲商賣の不注意是
れなり其輸出は年々増加して本年は十二萬箱を出
す可しとの豫算を示し尙ほ進んで底止する所を知らず
明治二十三年までは日本の輸出額二百一萬八千基にし
て伊太利に及ばざるものと百萬基なりしかども今日の
勢を以て進むときは數年の中に伊太利をも凌駕して
世界の市場に日本絲の名を專にす可きは萬々疑を容
れざる所にして日本を世界第一の生絲國なるに然る
に其生絲國の實際を見れば何千萬圓の商賣品を横濱に
在る五六の賣込問屋に任して唯外商の鼻息を窺ふのみ
各地の製絲家又は絲商人も大抵は金融に迫られて商賣
を持張するに由なく一年の絲を一年中に賣盡して僅に
毫末を留する者多しと云ふ以上は唯我輩が思付きの
まゝを記したるまでにして尙ほ詮索を廣くしたらんに
は工商社會の處に無限の事業あるを見る可し何れも
資本を要する事柄にして唯ふれに資本をさへ投すれば
利益は疑ふ可きに非ざればか日本の資本を多しと云ふ
我輩は其足らざるを憂る者なり一言ふれば許すれば今
の資本家は實業に手を出すの勇なく抵當貸の一方を專
務として恰も質屋を學び金融社會は無數の質屋のみに
して取る可き質物の少なきに窮するものなり之を名け
て金融緩慢と稱するのみならず雖も人情の利に走るは
水の低きに就くが如し今の資本の閉却しながら實業に
結合するを得ざるは水の逆流するに異ならず質屋の老
腐固執に於て堪ふ可けんや早晩一日その結合の端を開
て金融の繁忙を告げ隨て利率の上る可きは我輩の憂て
保證する所なり

○大藏省告示第十五號
根室本庫所屬熊牛支金庫本月二十日川上郡熊牛村
字標茶へ移す

明治二十六年
○通信省告示第百
來月六月一日ヨリ
明治二十六年
○日蓮宗興門
任期満ちたるを以
任の後に當選し
○篤志寄附金
鶴光美氏は義に製
屑けられざりしよ
に寄附したりと
○定期航海船
定期航海は年四回
等も追々増加の機
回と爲したる由に
日前同船に向け横
○地方通
○談話會 札幌の
話會を開き來會者
審議し會長及び幹
○大熊 日高國標
五日の頃どか土人
打留めたる大熊は
一次に過ぎ年齢
にて漸く運送し得
做い神案を張り熊
業にして多く産す
陸地を距るものと大
の方向にあり本年
津輕郡にて三千尾
鱈は二萬圓餘に達
なりと
○甲斐新海味
製法場は目下試験
○殖産會 石川縣
金澤公園博物館に
ける農業上の事を
長一名幹事は金澤
置くことなし同
ひる項目に付き試
關西府縣聯合共進
しむるものに決し
○保濟會 滋賀縣
保濟會の總會を開
回内閣勸業博覽會
に就て種々の協議
○同志會 滋賀